

かわらばん

妻入り

事務局

新潟県出雲崎町

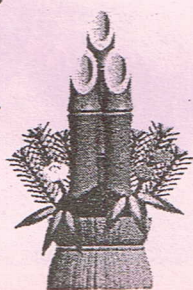
教育委員会

☎0258-78-2250

FAX 78-4559

あけまして

おめでとうございます



妻入りの街並景観推進協議会

副会長 村越 隆夫

明けまして、おめでとうございます。新しい年が始まりました。昨年は、大水害、台風、大地震と未曾有の自然災害が発生して、甚大な被害が出ました。

また市町村合併では、三町村の考え方の相違で結論が出ず、我が町は、単独で進む選択をしました。

さて、私たちのふる里（出雲崎）

は、江戸時代、金銀の荷揚げ港の天領の地として栄華を極め、その名残りの一つとして三キロメートル以上に及ぶ妻入りの街並が形成されました。良寛や芭蕉を代表とし、北国街道を様々な文人墨客の往来した人的な文化、海に面した地ならではの豊かな自然、豊富な食物（魚）の文化など、その長い時を経て、先人が築き上げてきた

様々な財産が、現在でもその多くが残されていて、その存在に感謝せざるを得ません。

また、現状では、残念ながら過疎化、少子高齢化、空家、空地など様々な難問を抱えております。

我がふる里の自然、歴史、文化、住む人同士の連帯感や素朴さなど、多くの良さを見つけ出し「温故知新」の気持ちを忘れずに、これからの時代にも必ず役に立つものがたくさんあると信じます。私たちの大切なこのふる里をもっと愛して行こうではありませんか。

街並ウォークに参加して

八月二十八日に街並景観推進協議会、町教育委員会共催の「街並ウォーク」を開催しました。当日は、天候にも恵まれ、絶好の散策日和となりました。街並の説明の後、今回は、「くるまや旅館」の三角堂と当旅館が所有しておられるかつて、出雲崎を訪れた、文人墨客の遺墨を見学しました。

参加された方から感想をいただきましたので、ここに掲載いたします。

山谷 糸川 孝雄

生まれも育ちも関西の私が会社定年を機に自然と共に生活がしたい願望が強かった。幸い家族の反対もなく、種々の物件にアタックしましたが縁あって、出雲崎町に来たのが一年半前、今では、新潟県人になって暮らしを楽しみむべく、あちらこちらを散策しています。

出雲崎尼瀬に入る所に獄門跡と荒谷橋がある。北国街道の石柱、海側に妻入りの家々が連なる。い



しんぞう
あけまして
おめでとう

かにも越後という風景に出会う。少し曲がった街道は、昔のままの様相を見ることが出来る。妻入り家は、イメージとして暗い、逆に何の装飾もしない方が私には、新鮮に感じながら角を曲がるとTV観光案内で見た「くるまや旅館」に出る。三角堂が有名で文学者などよく訪れた場所だという。やはり芭蕉と同じ「わび・さび」を求めてかと思った。代官所跡を巡って街道を行くと左右に間口が狭い妻入り家が連なっている。京都では道路に面した間口の広さで税を取ったため、商家は間口を狭くし、長い家を建てたが出雲崎でもそういった流れがあるのだろうか、それとも立地条件だけなのか興味がある。

それにしても多いのが神社、寺院の数だ。記念館も入れると三十ヶ所以上もある。全て見ることは無理だ。街道は約2kmとすると六十七m毎に一ヶ所ある計算である。この数は、「京都」「奈良」も及ば

ない。先人は、海上交通を通じて全国より出雲崎を経由した物流社会を作ったものと考えられるし、その繁栄ぶりも狭い街道に更に活気をもたらしたに違いない。



散策をして思ったことは、休憩場所の少なさ、ベンチなどの腰を休める所と街道の整備WC等々がある。街道らしく小さなお土産物売場など商工会青年部、住民が参

加できる街作りをする必要がある。妻入り家屋、夕日の名所をアピールするため頑張りました。

尼瀬 小林 美津子

出雲崎に生まれ、育った私ですが、出雲崎のことを訊ねられても、答えることができずに困ったことが多々あります。何か町のことを知ることが出来ないかなと思っていたところ「今度、街並ウォークがあるから参加してみたら、きっと勉強になるよ。」と友人が声を掛けてくれました。「これだ!」と思い「出雲崎総合大学」を受けてもらえる方達の仲間に入れてもらい参加しました。

当日は、すばらしい天候に恵まれ、また心地よい風もあり、歩くのには、最高でした。妻入りの街並を歩きながら、歴史的建造物や廻船問屋跡、主な屋敷跡の説明を伺っていると、その時代へとタイムスリップしたような感じがします。ふと御用小路に目をやれば、

佐渡から金銀の荷を積んだ船が出入りをしている様子が目に浮かびます。でも今は、ひっそりとその面影を漂わせている。



そして、今日のメインは「くるまやさんの三角堂」十三代目のご主人からの説明を聞き、その後、個々で見学をした。建物が三角形になっいて、天井には一人一人区切られた絵や書が描かれ、畳に

も一人一人区切られた名前が書いてある。それが相対面した茶室造りになっている不思議な建物を興味深く見学させていただいた。

今回の街並ウォークに参加して出雲崎の歴史と文化を学ばせて頂いたことに感謝し、これからのまちづくりに役立たせることができたらと思います。

妻入りの街(二十三)

住吉町 磯野 猛

人物往来(八)

安政三年(一八五六)のカラフト調査報告は、箱館奉行をして鳥井権之助の手腕を高く評価、直ちに北蝦夷地直捌所差配人に任命しました。安政四年(一八五七)春、

十二隻の船団がカラフト漁業の開発に向けて出航しました。この船団には、松川弁之助が箱館の五稜郭を建築中であつたので、代人として小林森之助(三条一の木戸出身)を参加させました。また蒲原の中村浜(現中条町)の佐藤広右

安政4年 カラフト御直場所漁場派遣船

船名	航 行 状 況
北 野 丸	箱館、米屋佐兵衛雇船、越後新潟長八船。沖船頭利助、増水主とも10人乗、外に稼方津軽の多助 安政4年4月21日箱館出帆、同日松前入津、同所で罾網25積み足す、翌22日同所出帆、安政4年5月4日クシュンコタン着
永 正 丸	北蝦夷地御直場所差配人元締松川弁之助雇船。越後国梶浦直船頭彦蔵、増水主とも11人乗 安政4年4月21日箱館出帆、同年5月4日クシュンコタン着
栄 福 丸	北蝦夷地御直場所差配人佐藤広右衛門雇船。沖船頭平吉、増水主とも11人乗、外に稼方越後中村浜住吉、南部日高郡10人 安政4年4月13日津軽青森出帆、同月19日箱館入津、同月24日箱館出帆、同年5月4日クシュンコタン着
来 福 丸	御直場所差配人佐藤広右衛門番船。三十郎外20人乗組 安政4年3月18日越後中村浜出帆、同年4月1日松前着、同月6日出帆、同年5月4日クシュンコタン着
長 重 丸	御直場所差配人鳥井権之助供2人、番人女房2人 安政4年3月14日箱館出帆、同月22日宗谷より長重丸に乗組、シラス着
毘沙門丸	弁之助代亀七雇船。大工10人、土方16人、漁稼1人、船方増水主とも10人 安政4年5月5日箱館出帆、同年5月15日昼九ツ時クシュンコタン着
順 風 丸	箱館御用取扱弁之助代森之助雇船。医師元貞、森之助伴峰之進、漁方稼8人、大工4人、木挽10人、土方28人、船方増水主とも8人 安政4年3月29日箱館出帆、風順悪く、所々滞泊、同年4月29日星シラス着
不 明	箱館御用取扱弁之助雇船、大坂江之子嶋。沖船頭健次郎外増水主とも10人乗 安政4年5月5日箱館出帆。同年5月17日着(着場不明)
祥 風 丸	平八船。乗組員松前・箱館外8人、南部5人、庄内3人、船大工3人。航海日・着場とも不明
唯 鳩 丸	新三郎船。乗組員南部17人、松前・箱館2人、津軽1人、越後三条・新潟2人、木挽2人。外は不明
豊 年 丸	福松船。乗組員松前・箱館8人、南部12人、秋田6人、羽州3人、越後新潟1人、津軽1人、仙台1人。外は不明
龍 善 丸	御直場所差配人元締弁之助雇船、船頭定八。順風丸と同時にシレット岬北上。外は不明

(「安政五年三月より御直捌北蝦夷地御用留」『新潟県史』通史編5 467ページより転載)

衛門も加わっておりまし。船名は、北野丸、永正丸、栄福丸、来福丸、長重丸、毘沙門丸、順風丸、祥風丸、唯鳩丸、豊年丸、龍善丸、船名不明の十二隻です。この船団の乗組員は、総人数二七四人で、

現地の住人が八五人加わっておりまし。安政四年四月二十一日、出航した船と三月一四日、五月五日とそれぞれの準備の都合で出航しました。五月四日に一番手は、クシュンコタンへ着岸、二番手は、三月二二日シラスに到着、漁場の開拓に着手しました。カラフト

東海岸のオチヨボツカ、マアヌイなどの漁場を開き、オボチヨツカだけで罾一〇〇〇石を漁獲しました。西海岸でもクシュンナイ、ウシユロなどでも予想を上回る豊漁で大漁大漁と意気が上がりました。箱館奉行もカラフト漁場の大成

功に今後三年間、カラフトの漁獲物を新潟湊に直送することを許可して、新潟湊への入湊の際は、入湊税を免除する特別な権利も与えました。

第一回の出漁に成功した越後の船団は、更に多くの漁場を開こうと安政四年（一八五七）多くの土方、木挽、鍛冶、番人などをクシユンナイ、ワアレ、シラヲヲロ、キチヨボツカなどで越冬させました。しかし寒さは、内地とは比べものにならない厳しい酷寒で、脚気や栄養失調で越冬者四五人の半数以上の二四人が死亡するという悲惨な状況となりました。幕府は、遺族に対して弔慰金三〇〇匁を贈り、越年生存者の労をねぎらって、番人には金一分、人夫には鳥目（銭）一貫文を与えました。松川弁之助も箱館の高龍寺で大法要を行い、死者の霊を弔ったようです。安政五年（一八五八）漁期に期待した越後勢は、弁財船二〇隻に二年間の食料、建築資材、衣類、

漁具、濁酒、古陣羽織（現地住人への贈り物）などを積み、大工、木挽、鍛冶、番人など総勢三六〇人を率いて、六月に箱館を出航し、東海岸のマアヌイに到着しました。

しかしマアヌイは、未開の地で落ち葉が腐食せず、そのうえ藪や湖沼が多くて家を建てることもできず、海浜に仮小屋を建てて、奥地を切り開いてから越年して家を建てなければならぬ不便な土地でした。しかも、この年は、漁が不漁続きで、大変な時代で大切な塩や網、船などを流失する損害を受けました。更に翌年、安政六年（一八五九）も不漁が続き、安政五年秋から越冬した者にも死者が出るなどして、漁場の引上げの声が出るようになりました。鳥井権之助も万延元年（一八六〇）四月「差配人辞退願」を提出してカラフト漁場から手を引きました。しかし、この箱館に残ってカラフト漁業に成功した人たちも多くおりました。

日本民俗建築学会主催

「越後と佐渡に生きる民家と

街並」シンポジウム

十月九日 柏崎にて開催

日本に古くからある民家や街並みの歴史的価値を再認識し、維持活用方法を考える「シンポジウム」が開催された。新潟大学副学長の五十嵐由利子さん、高柳町春日総務課長さん、洋画家の早津剛さん、県民俗学会の佐藤利夫さんがパネリストとして出席され、コーディネーターを長岡造形大学助教授の平山育夫さんが務められ、それぞれの立場で意見交換が行なわれました。

この中で、新大五十嵐副学長さんは、最近の民家は、快適性の向上が優先され、「集まる生活」の習慣の減少が見られるようになった。これは、ドアの生活が主体となったのではと、昔からあった引き戸の文化を希望する。また家並みの美しさは、「用の美」であり、家の

中は個人のものだが、外観は地域の財産として重視して欲しい、と強調されました。

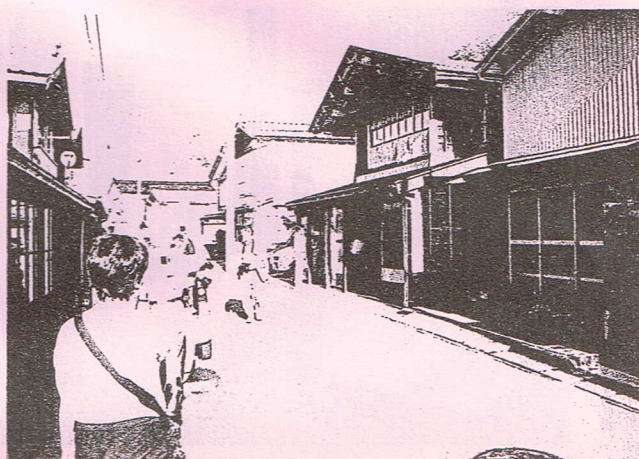
三十年以上県内の古い民家などを描いている早津さんは「絵画に残す雪国の民家」という話の中で、昭和四〇年代は、雪国の風情を感じさせる景観を容易に見ることができたが、この時期を頂点に高度成長の波で、人々が流出し、過疎化が進み古い家々が崩壊するようになり、近年は、形式や色彩も多様な新建築が生まれ、一気に町や村の姿が変化してしまった。新しさだけを求めて古いものは、気軽に失われていく時、そこに生じる「心のすきま風」のようなもの、空白のようなものをどのようにして埋めたら良いのかと話されました。



このシンポジウム主催者の柏崎市立博物館の三井田館長さんは、当町の街並みやその民家の構造について話され、廻船集落として栄えた宿根木も昔の面影を色濃く残しており、家並みの様子は、当町とは異なっているが日本海を舞台にした他地域との交流が住文化に大きく影響を与えたのでは、と考えている。今回、各分野で活躍されている研究者から講演していただき、保存の意義や問題点を再認識する良い機会となったのではと話されました。

またシンポジウム参加者四十余名は、翌日午後当町の街並みや民家の見学を行いました。尼瀬の高治さん、井鼻の孫十郎さん宅を家の中まで入れていただき、間取り、構造などを興味深く見学されました。専門家などからは、茶の間の吹き抜け天井の骨組みや狭い土地を有効に使い、坪庭や明り採り窓をうまく利用しておると関心されており、住んでいくには不便なこ

とが多いと思われるが保存活用に努めてほしいとのことでした。



(シンポジウム翌日出雲崎視察風景)

「ツマイリ時間」

妻入りの町家での日本画二人展

十月二十二日から二十五日まで妻入りの町屋を会場に東京芸大生時代に出雲崎を訪れたこともあり、現在も仕事の傍ら、制作活動を続けている二人が作品展を開催しま

した。どのように感じたか感想をいただきました。ありがとうございます。

樋口 広一郎

今回のグループ展の二日目に地震がありました。幸いにも自分のいた出雲崎町の海沿いの辺りは、被害が、ほとんどなかったのではないかと思います。それで結局、会期四日間を予定通り開催することができました。開催にあたって、印象深かったのは、やはり、地震後の人々との交流でした。作品を通して気持ちの交流があるのが、本来なのだけれど、今回は、それ以外に同じ体験をしたということ、何か不思議な連帯感のようなものを強く感じました。

今回、作品展示会場として、場所を貸していただいた星野さん、八木さん、いづもさんは、いづれも作品を展示するにあたって、非常にご理解・ご協力をして下さり、いろいろとアドバイスなどもして

いただき、いい勉強になりました。そのほかにも町の方々には、たいへんお世話になり、あらためて出雲崎の懐の深さというか、温かみを感じました。

これからもまた、街並スケッチ展示や作品展示などをする時には、是非、参加していきたいと思っています。今回いろいろとお世話を下さった人々には、本当に感謝しています。ありがとうございます。

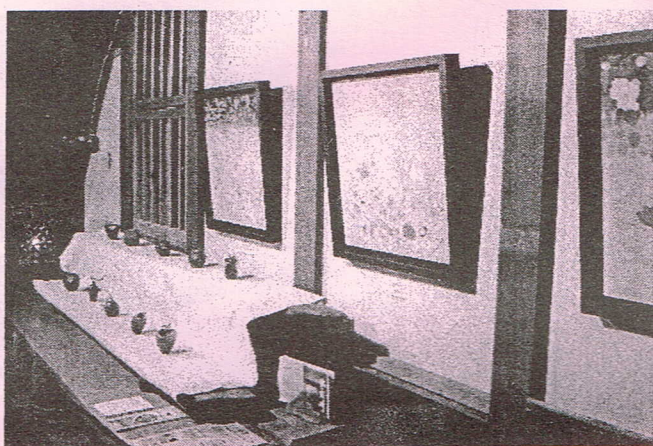


磯部 光太郎

今年の新潟は、大変な事の多い年となり、多くの人が災害に遭われた事を考えると心が痛みます。あらためて自然の力の大きさや強さを痛感しました。そんな中、出雲崎での町屋を舞台にした展覧会ができた事をうれしく思っています。あいにく会期中に新潟中越地震に見舞われましたが、それでも数日の間に町の方々や新潟県内やその他の地域から展覧会を見に来てくれ、色々な話ができて良い経験となりました。

普段、私たちは、東京を中心とした地域でギャラリーや美術館など展示を目的としたスペースで展覧会を行なっています。その魅力やおもしろさもありますが、今回の出雲崎での展示は、ギャラリーとは違う魅力と可能性があると思えました。例えば、町の歴史や雰囲気、その建物の形や歴史を持った重み、木の柱や漆喰などの素材感、ギャラリーとは違う魅力が

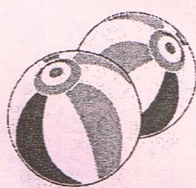
ありました。私が大切にしたのは、その建物の持ち味を壊さず、なおかつ、古くならないようにしました。屏風や杉の板や高柳町の門出和紙も使用し、作品を制作しましたが、展示してみても、やはり古い建物とよく似合うと感動しました。



もう一つの魅力は、近所の人たちが気軽に展示を見に来てくれたことです。銀座のギャラリーなどは、一般の人が気軽に立ち寄る雰

囲気が少なく、入りずらく思う人は、多いと思います。ギャラリーのオーナーや作家は、もつと気軽に見に来てほしいと思っていると思います。本来、絵というものは、そんなに堅苦しいものではなく、CDで音楽を聴くように気軽に楽しめば良いのだと思います。おもしろさと可能性をもった展示となりました。

今回の展示に協力していただいた教育委員会、街並景観推進協議会、展示会場として自宅を提供してくださった「やきもの工房いづもさん」、「星のまきばさん」、「八木さん」、その他多くの人たちに助けていただき、今回の展示が実現できました。本当にありがとうございます。思い入れのある出雲崎が今後も文化的に発展する事を強く願います。



あとがき

この度の「新潟県中越大地震」に被災された皆さまにおかれましては、心よりお見舞い申し上げます。

七・一三水害の後だけに、いろいろな所で被害が出たようです。道路も随所で陥没したり、マンホールが隆起したりしていましたが、日に日に復旧が進み、この「かわらばん妻入り」が発行される頃には、ほとんど修復されていることと思います。皆様方のところでは、被害の復旧は、いかがですか？我が家では新築したばかりで地震に遭い、数箇所壁紙がはがれたり、亀裂が入ってしまいました。被害が大きい地域から順番に修理に来るようで、我が家には、いつになるのかわからない状況です。

新年早々寂しい話ですいません。今年は、皆さまにとって良い年でありませう心よりお祈り申し上げます。

石井町 納谷 稔